

2010年7月5日（月）勉強会 流れ 作成者：想田 瑞恵

（想田、レジュメ読み上げ）

檜垣先生（以下H）：想田さんが対話を肯定したい理由って、嫉妬などのいわゆる否定的な気持ちを認めたいということ、もう一つなんでしたっけ？

想田（以下S）：自分の中に確実なものを対話は見出している気がする、ということです。

H：確実なものってどういうこと？

S：信頼に値するもののことです。それがあから、自分も他人も単なる物ではないと思えるようなもののこと。触発された気持ちでは確実なものになりえないので。

田中さん（以下T）：気持ちはすごく揺れ動くものだから、揺るがない確かなものが欲しい、ということですか？

S：そうなんですけど。「揺るがないもの」とか「ぶれない軸」とかって言い方は、対話においては敬遠されるものでしたっけ？自分をかけがえのない存在だと思えているようだ、という点が、対話を肯定したい理由なんですけど。

H：なんかいろんな考えがごっちゃになってる気がするけど。確かに、対話においては、人は単なる歯車ではなくて、自立した人格ある存在ですね。

増田さん（以下M）：「歯車」ってどういうことですか？

S：触発された気持ちが自分のすべて、ということです。でも、自分が、外部からの刺激によって動く単なる物、歯車でしかないということは受け入れがたく、才能や個性で価値を加えようと必死なんです。だから、それらに恵まれたものに対して激しく嫉妬するし、ロールズの言う「恵まれたものの状況改善」は「ほどこし」にしか思えません。

H：まずロールズについてですが、「能力差があるから是正すべき」ということと、「ある能力が社会において価値があるのはたまたまであるから、当然再分配すべき」という考えは区別しないと。その上でですが、自分自体に価値があると考えから、嫉妬について悩むんだと思いますね。他の人ではなく、自分が、その才能の持ち主でありたかったということ。そもそも個そのものに特別さはありません。社会で価値と思われているものは大概は見せ掛けだと思っているから、嫉妬も時にはするけれど、それに支配されることはない。価値が見せ掛けだと思えているなら、つまり「たまたま」なんだと思えているなら、自分自身にも相手自身にもそういう価値はないと思えるはずです（こういう相対的価値とは違う価値を、たとえばカントは見出しているようですが）。

S：えっと。「見せかけの価値だ」というのも、たまたま自分に与えられた感受性によって思っているだけですよね。この勉強会に参加しているのも、自分の意志などではなく、参加をよしとするような経験があっただけのことで。触発された気持ちしかないのだから、対話をするような気持ちになれない人には対話は不可能だし、対話をしている人もたまたまそうなのだけですよ？でも自分自身に価値はあってほしいような。

H：いやまったくわからない。まず、「すべて単なる気持ちの傾向性だ」というのは前提に

すぎないし、その前提の下でなら自分は歯車なのだから、「自分を特別と思いたい」というのはおかしいでしょう。

S：「すべての行動は自分の気持ちのみから生じたものだ」というのは前提ですか？

H：人と話している時点で、例えば理性のようなものを認めているでしょう。コップに話しかけますか？いや話しかける人もいるかもしれないけど、その場合その人は、コップにそのような理性があると思っている、ということですね。

M：想田さんは、感受性や気持ちを固定的なものとして捉えすぎている気がします。別の観点から気持ちを考え直すこともできるでしょう。たとえば、韓国の人は立てひぎでお碗をおいて食事をします。日本人にとっては不快ですよ。でも「そういう文化なんだ」と知ること許せるのではないですか？それが勉強する意味でもあるでしょう。つまり楽しく生きるために、ということです。今、知ることに重点をおいて説明しましたが、「相手を理解することが大切」、という意味です。

H：感受性によしあしはありませんね。感受性が「特別だ」と思うことがよくない。相手との違いを理屈で追い詰めていって、もう生きている限りこの違いは残るだろうというときには、「感受性の違い」というしかない。でもそれも暫定的で。感受性の違いは、限界として、結果として、もちろん結果といえど終わりという意味ではなく、現れるもの。特別な感受性によって対話が成り立つのではなく、理性の行使・対話が前提とされて、感受性の違いがある。これは、理屈が駆使された哲学的対話の果てに見出されたものなんです。

M：「理性の休憩所」としてのものですね。

H：そう。生物学的には、感受性は何も特別ではなく、そもそも違いすらない。遺伝子や与えられた環境の差しかなく、同じ条件になれば同じ感受性を持つ。つまり、感受性に人との違いはないんです。

S：その説明は、とても納得できました。ある感情を伝えたいと思えば、感情以上のことを考えているということですね。

H：不愉快な感情でも、人と話すことでそれが消えるかもしれないということです。

M：相手のことを理解したら、相手に対する不快さが消えるだろうと思う。不快の放置ではなく、楽しく生きたいと思うから対話する。

H：相手のことを「本当に理解したいと思うこと」と「ただ不快に思うこと」は区別したほうがいいですね。友人や家族に対しては、最初から不快に思うことが少ないから、対話は必要ないんでしょう。人に不快感情を抱くから対話をするんですね。嫌っている・嫌われている事態というのは、誤解がある状態だから。僕自体ではなく表面的に嫌っているだけのことなんですね。

T：「誤解がある」って自分が正しいということですか？

S：私もそう思いました。その不快が表面的だと思えるのは、確かな自分・正しい自分というものを信じているからではないですか？

H：誤解が言いすぎなら、理解の違いによる誤解やすれ違い、齟齬。「立てひぎでお碗をお

いて食事すべきだ」も「お椀は持って食事すべきだ」も、絶対的な前提でも何でもなかったということです。

M：確かに、誤解という言い方だと、「本当の自分を誤解している」というようにも思えてしまいますね。でもそうではなくて、相手にある種の偏見を抱いているだけだったとわかるということです。

H：不快な感情は、実は単に機械的に表れたものではないのではないのでしょうか。理性ぬきでの感情の表出はありえないでしょう。

S：「ありえない」というのがよくわかりません。考えというものは感受性に寄せられたものですから、「考えがすれ違う」というのは「感受性がすれちがった」ということで、どうにも回収できないような違いに思えるのですが。

H：なぜ「考えが違う」に理由を探そうとするんだろう。「考えが違う」でいいでしょう。中島さんは、本人は絶対認めないけど、人と関わりたいと思っているし、対話を信じているよね。だから、彼の「感受性が違う」という考えは、中島さんが対話をし続けて得たものです。そのままの意味で受け取ってはまずいでしょう。

M：それに、感情に理性が介入していると思わないと辛いと思いますよ。

S：でも、やっぱり、理性を自然に信じられているのも、たまたまなのではないですか。

H：どうも理性を実体として、それこそダイヤの原石みたいに考えている気がする。理性の存在は、差し出せたり証明できたりするものではないでしょう。ただ「話ができるなら理性があるはず」というだけのことです。

S：でも、ある意味特別な理性ですよ？その理性があることが、私が自由な主体であることの証明となるわけですから。

H：もちろん、感情の奴隷としての理性だけではないということが必要です。感情の奴隷としての理性は理性ではないというのが、カントの演習でずっと読んでいることです。また、「自由な主体」の状態というのは、自他の区別がないと考えることもできる。スピノザが、神があって、我々は神の様態としてあると言ったのも、あながち間違いではないですね。

S：自他の区別がないってどういうことですか？私は自我自我と考えてしまいますし、あるいは、対話においても、譲れない部分というものは出てきますよね？

H：それは、我々が、理性と体を持って存在しているからではないですか？理性だけなら、違いは出てこないかもしれない。

S：「違いはない」というのと、「みんな同じである・取り替えがきく」というのは、異なりますよね？

H：異なりますよ。それは、火曜1限でまさにやったところですね。「取り替えがきく」のは、他にも同等のものがあるからです。ですが、一つしかないものは、それしかないのですから、取り替えはききません。

S：えっと、でも、違いの表れがどういうものになるのかわかりません。違いがないの

なら、私が私としてあることに価値はない気がするのですが。

H：自分の差異が特別であるという根拠はどこにもないですね。

M：理性という一つの物差しで計ると、違いが見えてくるということでは。この教室にあるまったく違った4つの物質を、同じ人間だとみて初めて、違いとは把握できるものなのだと思います。

S：オランウータンと人間は違いすぎるから、差異を見出そうとすら思えない、ということですか？

H：ぜんぜん違う。増田さんが上手く言ってくれたように、「同じ」と言っている時点で理性を行使しているということ。

T：ああ、なるほど。違う脳なのに、同じ働きだと思えるのはなぜかと言えば、理性の行使による、ということですね。

H：そう。理性自体は証明できないけれど、理性を使っているとしか言いようがない。

M：まったく異なるものを、共通の基準でもって「同じだ」というためには、捨象したものがありますよね。

S：「同一である」と言えるということは共通の基準があるということで、同一性を見出すから、捨象された違いが見えてくる。「違う」と発すること自体が、すでに理性を使っている証拠なんですね。そうして理性を行使することに価値があるから、尊重すべきなんだということだと理解しています。

H：そうなんだけど、それは1年間の授業を経ての結論だから。まず何を言えばいいのかということでは、「誤解されているのはいやだから、対話しようと思う」ということを強調しようと思うんだけど。

S：誤解は、感受性の違いの現れでどうしようもない、解消できないものだから、関係をたってしまうしかないと思うかもしれませんよ？私ならそう思います。

H：なんで「どうしようもない」と思ってしまうんだろう？

S：相手を不快に思ったことは、動かしようのない事実だからです。だから、不快に思うようなものとは関係を切るしかない。

H：いや、それ何も解決されていないでしょう。

M：シャッターを下ろし続ける行為ですよ。下ろしたシャッターに囲まれて、どこにもいけなくなるというような。

H：でもそうか。誤解だとは思わないで、ただ不快だと思っているんですかね。嫌という気持ちと不当は違いますからね。

S：きっとそうなんでしょう。友人との間なら、不快は「誤解」でそれを解こうと思えます。誤解を解くのにかかる労力は少ないですから。そうではないあまりに違いすぎるものとは、言葉を交わしても、その不快が取り除かれることはない気がします。ならば、不快な気持ちになる原因からは、逃げるのが適切な行為です。

H：動物はそうしますね。理性や正義を信じない人が増えている、ということなのかな。

S：動物的な行動をとる人が増えた、ということですか？

H：いや、きっと理性を信じていないんじゃないかと、理性を突き詰めて使っていないだけでしょ。単に「不快だ」というだけでは、関係を切る理由にはなりませんから。

S：先生は、理由とは、何らかの理屈付けられたものだと思っているということですね？でも、本当にそうなんですか？「嫌だ」という気持ちは行為の十分な理由ではないですか？

H：それを「理由」と言う時点で理屈を言っているのではないですか。理由を突き詰めて考えていないだけなんだと思いますね。

S：そうなんですかね。えーと。レジュメに関して他に何か気になる点があれば教えてください。

H：「対話的態度は理想的だと思っている」というこの書き方はずるいというか卑怯でしょう。いいと思ってるならやればいいのにとっと思ってしまう。

S：関係ないですけど、インフレなんですか。「ずるい」とか「卑怯」とかいう言葉に過剰に傷つかなくなりましたね。それはともかく、アイドル的なもの・偶像としての対話をここでは意味しています。対話はできるのだろうかという気持ちが、今でも少し残っていますから。

H：アイドルでも同じことです。憧れなら、そうなりたいと目指すでしょう。確かに、「理想と現実」と言うとき、あなたのような使い方をする人がいることはわかります。でも、理想とは「目指すもの」でしょう。それが理想の本質なはずですよ。

S：えっと。「きらきらして憧れるけど、手は届かないもの」が対話なんだという感じなんです。

H：それならまだわかるけど、でも納得はできない。誤解を解きたいと思って言葉にするだけで、対話は始まっているでしょう。

S：自分を特別だと思いたい気持ちが強いとなかなか難しいですね。合意に向かうことで自分の価値がなくなる気がしてしまう。不快な気持ちは誤解だと思って、単なる気持ちではなく理屈付けられた理由があると思えるかどうか、なんですけど。

H：やはり「あるがままでいい」という言葉がよくないですね。自己決定という言葉も、僕の中では「責任を負う」くらいの意味なんですけど、どうも違う意味が出てきてしまっているみたいです。

S：「私が私として価値がある」という言葉に、「特別」という意味を加えているのかもしれませんが。対話において、その人に価値があるというのは、「理性を行使しているなら自由な意志を持っているから、その意志の持ち主には価値がある」ということですよ。理性を行使している限りにおいて、そのことを尊重しているんです。でも、どうも「私が私としてあることは特別なんだ。だから価値があるんだ」というふうに思っている気がする。そもそも「私としてある」ためには、感情ではなく理性の行使が必要なのに。私自体に価値がある・特別だと思っているから、対話は単なる傾向性であると考え、その傾向を持った人に対して「ずるい」という気持ちを抱くのでしょうか。抱いています、今も。

H：対話に参加しやすさがあるというのは、そのとおりでしょう。特に、心理学で言うベーシックトラストがないとだめかもしれませんね。

S：親や教師まで取引である「優しい人間関係」だと、それは得られませんね。

H：教師でそれを得ようとするのは無理でしょう。宮台真司も言うように、親に自分を全肯定してもらえない経験がないと、対話に踏み出せないというのはあるかもしれない。でも、それは教師にはどうすることもできない。全肯定は、その人を何があっても見捨てないという覚悟あつてのものですから。できるのは、親にきちんと全肯定してもらえるような社会環境を整えるようにするくらいですね。

S：評価を下す役割である教師に、全肯定を求めるのはおかしいということですね。

H：そこを誤解している教師が多い気がする。全肯定するのは、教師の役目ではないでしょう。教師は、ただベーシックトラストがあるものだと思って、誤解を解けるものは解いていこうとするだけです。

S：誤解という言葉に、やはりひっかかります。「自分が正しい」と言っているのではないんですよね？誰も正しくないということなのですから。そうすると、でも、どうしても、「そういう考えを持てる人がうらやましい・ずるい」と思えてしまいます。

H：「持っている者は楽に参加できるからそう言えるのだ」というのには一理あるかもしれない。でも、持っている僕に言えることではないけれど、と予防線を張った上であえて言うのなら、生死の狭間にまで追い込まれていて、声をあげるしかない人・対話をするしかない人もいますでしょう。そういう人たちから見れば、参加しやすいかどうかの問題は、贅沢なものではないですか？

S：確かに、モラトリアムゆえの悩みです。それは認めます。でも、そういう声をあげるしかない人に比べれば自分は恵まれているから、と思って対話参加を決意するのは、なんだか優越感に満ちていてずるい気がします。

H：よくわからない。何で優越感を覚えるんですか？

S：ああ、そうですね、優越感ではないです。声をあげるしかないような環境とそうでない自分の環境を比べていたんですが、そこに優越感を感じるなら、そもそも対話をしていないですね。対話への参加しやすさの話でした。でも、まあ、贅沢だと言われてそれに納得しても、「ずるい」という気持ちが消えるとは、なかなかならないです。

H：少なくとも、参加しやすさの違いは、対話に参加しない理由にはならないでしょう。レジュメにあるような「人に嫌われても立っていられる」人は、対話においてもいいです。ただ、「嫌われている」というのは、大抵誤解によるもので、絶対的なものではないから解消できると信じているだけです。

S：やはり、「嫌われていることは絶対的でなく解消できる」と思っているのは、たまたまなのだから、ずるいという気が、どうしてもします。

H：そうかもしれないけど、対話をしていると認めるなら、傾向性の考えはでてこないでしょう。今ここで、自らの意志ではなく、機械のように話していると思いますか？

S：「今ここでよい関係を築きたい」と、今までの経験から思うようになって話しているだけかもしれないです。参加して下さった方には非常に失礼な話ですが、ここにいるのも各人の傾向性だとは思えません。

H：「思えない」といつている時点で理性を使っているでしょう。「思っている」とする主体は機械ではないはずです。

M：それに、外からは、十分対話をしているように見えますし。

H：言葉をこうして交わしているんだから、とっくに対話はできているはずなんだけど。本人が気づかないだけで。

S：でも、本人である私が、対話で承認を得たいと思って、得られていないと思ってしまっているのですが。

H：それもやっぱりそう思っているだけで、承認は得られている気がしますね。

S：あれ？外に、つまり他者にそう思われているならそれでいいんでしょうか？そんな気がしてきました。しかも、もしかしたら私も承認は得られているとされていて、その上で、自分の「特別さ」を承認してもらおうしていたのかもしれないです。うん、そうかもしれない。他に、レジメに関してわかりにくかったところなどありませんか？

M：レジメの「『育て方が悪かった、教え方が悪かった』との言葉に抵抗する術を持たない閉塞感」というのが、唐突過ぎて何を言っているのかわからなかった。

T：そうですね。後まで読むとなんとなくわかるんですが、僕も唐突な気がしました。

S：増田さんがさっき言ってたシャッターの感覚なんですけど。

H：「特別に思われたい」という前提があるから、自分の特別さを否定するそうした言葉に対して抵抗したいんだけど、特別さの根拠が自分の気持ちだから、本質的な反論ができない、ということまで説明しないとわからないですよ。

S：はい。どうもそうらしいです。私には、「自分は特別な存在である」という前提があって、しかも誰もがそう思っているに違いないと考えていたようです。だから、「対話しようと思える人はずるい」の一念でここまで来たわけですが。でも、あえて言うなら、なぜ自分を特別だと思わなくてもやっていけるのかと、問いたいです。自分が特別でないのなら、卑小な存在なら、明日を生きる価値を見出していただけますか？

H：特別か卑小かじゃなくて、いわゆる「普通」なんだけど。

S：特別でなかったら卑小です。普通は平凡であり、卑小ということではないですか？

H：やっぱり、佐藤学も10年以上前から言っているように、個性重視はよくないですね。個性がないことは平凡であり卑小という考えはおかしいです。そうやって、「自分を特別だと思う」ということを考え直すきっかけとして、今までのような問題意識を持って、「ランディ・パウシュの最後の授業」を見てみたらどうだろう。この人はある意味本当にすばらしくて、死を目前にしてユーモアたっぷりの感動的な授業をする。自分にはとてもできないことだから、確かに感動的なんだけど、ふと、言っていることは全部自慢じゃないかと思えてしまう。そこを考えると、自分を特別だと思うことのうさんくささがわかるよ

うになるのでは、という気がします。

T：どうしてそれがうさんくささになるんですか？

S：自慢をするなと思う、あるいはその人をずるいと思うということは、つまり、同じような条件が与えられれば、私だって賞賛されるのに、ということですよね？それって結局、自分自身に価値があるというより、条件や経験のほうに価値があると思っていて、自分を特別だとは思えないだろうということなのでは。

T：ああ、なるほど。

H：そうか、そうも言えますね。ここでは「みんなが特別だと思うことのうさんくささ」を言いたかったのですが。確かに感動的なんですけどね。特に家族に対する愛は疑いようがない。ただそれをなぜ全米に放映しなくてはいけないのか、とは思いますね。

S：嫌な言い方になりますが、死を目前にした人が、生きることを語るのは感動的で当然ではないですか？目前にしていない人が、流されないで生きることを語るほうがよっぽど困難だからこそ、感動的な気がします。家族に対する愛も、たまたま愛せるような家族だった、というだけのことでないですか？

H：そこまで話を小さくしようとするのもどうかと思いますから、とにかく見てみてください。でもまったく感動しないのかな。

S：いやするかもしれませんよ？私は、正常に思われたいという願望も強いですから、そういうものは感動しないといけない、と思うかもしれません。感動を読み取ろうとするかもしれませんね。

H：特別に思われたいのに、正常に思われたいの？

S：正常でない特別なんて、単なる異物ですよ。

T：それわかります。正常であるということの上に、特別は成り立つものなんですよ。

H：正常も特別もって、なんだか欲張りな気がするんですけど。

M：想田さんって、このレジュメを読んでも思ったんだけど、「こう思わなければいけない」という気持ちが強すぎる気がしますね。

S：たぶんそうなのでしょう。特別さを見出す条件みたいなものですから。そういう、自分のみに価値があると思うような変な、根拠のない優越感はよくないんでしょうね。

H：誰にでもあるような自己愛が対話の妨げとなる、という指摘はそのとおりでしょう。

S：ただ、でも、自己愛をなくしてしまっただけは、「自分の気持ちを偽らない」ということにはならないです。特別さが私の中にあってほしいと思います。

H：特別さに関しては、「あるかないか」考えることがそもそもおかしいですよ。

S：そうでした。「自分が特別である根拠なんて探しようがない、あるはずがない」ということを念頭に、まとめてみようと思います。全体を通して他に何かあれば教えてください。

H：前回のまとめの、石を投げつける例はよかったですね。「投げつけるべきではない」という思いは、自分かわいさからくるものではないか、というのは、この場合考えすぎな気がします、大事にしていいい理屈だと思います。今もそう思っていますか？

S : そうですね。そのあたりと今回の話を結びつけて考えることは、まだできないです。「投げつけるべきではない」という気持ちは、正しさでもなんでもなかった気がします。

H : 自分に都合がいい正しさ以外のものもあるはずだ、ということなんですけどね。

S : そして、そういう方向で、つまり、都合のよさだけを求めるのではないものとして、対話の可能性をうちだせればいいのでしょうか。

H : そうですね。そういう自分の気持ちの追求をやめるというのは、理性を行使していないということです。自分に都合のいいだけの正しさで終わってしまうのはおかしいです。

S : 自分の感受性だけで正しさにしているということは、正しさの意味を違えてしまっているということですね。

H : 少なくとも、「理性や対話も都合がいいから利用する」と言うだけで、理性を信じているのですから、正しさを追求できるはずです。